テイルズオブエクシリア―【題名未定 】―

リサイクル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
テイルズオブエクシリア―【題名未定　】―

【Ｎコード】
Ｎ２３１９Ｙ

【作者名】
リサイクル

【あらすじ】
とある原因で、兵士に追われてるＳ級犯罪者―――ジュード・マティスとミラ＝マクスウェル。青年　ソーマ・シックノードは彼らと旅することで、大切な仲間を得る。
そんな中で、ソーマの残酷な過去が再び明かされる。
ソーマは過去の後悔をバネに彼らとどう生きていくのか。
＝＝＝これは、作者が何となく作った駄目文です。その上、更新速度は遅いです。ご了承下さい。

オリキャラ紹介１

〔名前〕ソーマ・シックノード

〔一人称〕僕

〔年齢〕１６歳

〔身長〕１７３Ｃｍ

〔体重〕５５Ｋｇ

髪は黒で顎辺りまでの長さだが、右の髪だけ、左の髪より３Ｃｍ長い。　目は漆黒。二本の剣がクロスした白のアクセサリーを首に掛けている

袖と背丈が短い黒のジャケットを着ており、中には黒のセーターを着ている。

ズボンは生地が薄いグレーの長ズボンで、白い独特の紋章がある。

誰にでも優しく分け隔てなく接する温厚な性格。傭兵として働いている。他人を心配するが、自分が心配されることを嫌う。時に応じて、性格が味方敵問わず絶対零度になる（二重人格ではない）。

料理好き。

昔の自分に後悔している。アルヴィンとは初対面だが互いの私情を知っている。親に捨てられたため、本名を捨て、唯一信じた同じ境

遇の友に、新たな名前（偽名）を付けあった。だがその友はある事件で死亡する。それが原因で、実際はジュード達と交友関係を保ちつつあるが、裏ではどうしらたいいのか悩んでいる。

第1話（前書き）

始まり始まり／（＾ｏ＾）／

第1話

「ふぁ～、やっと着いたか。ア・ジュールに」

と言っても、ラ・シュガルと変わった所はないな。イラート海停だけか？

とりあえず、ここで情報収集だな。どこから聞こうか。

「お、そこの兄ちゃん。旅人か」

船を降りた所で、中年で商売人の男が話し掛けてきた。

「旅というか、ちょっと賞金首を捜してここまできたんだ」

「へえ～、兄ちゃんの年でね～。君は兵士か何かかい？」

「ああ、僕は傭兵だ」

僕は商売人の売り物を見ながら答えた。

あ、このバレンジとかいう果物美味そうだな。

「だったら君は誰かに雇われて賞金首を捕まえるために、わざわざ外国からきたのかい？」

「うん。そうだよ」

まあ、雇われたのは嘘だが僕にはそいつらを追う理由がある。

「これ、買っとくよ」

そう言って、バレンジを片手に持って商売人にガルドを払った。

僕はそれを食べながら、賞金首の情報を探すことにした。

その賞金首――ジュード・マティスと金髪の女、S級犯罪者らしく、ややこしいことに彼らも訳ありだそうだ。

ややこしいと言うのは彼らとしてはで、僕にとったら好都合なのだが……

「そうだ！？宿泊記録」

犯罪者は昨日ここに船で逃げ込んだらしいから、疲れて休暇を取っているかもしれない。そうとなれば、宿に泊まっているはずだ。

彼らの足取りを掴む為にも、宿に行ってチェックインしてるか確かめることにした。

〜宿屋〜

「今日、朝ですか」

「はい、マクスウェルがどうとか、二・アケリアに行くとか言っていましたけど」

宿屋のお姉さんの管理人よると、ついさっき出て行ったらしく、二・アケリアに行くとかの話しを盗み聞きしてたらしい（癖らしい）。

うん、この人が盗み聞きする人で助かった。じゃないと彼らを見失っていたからな。良かったな、自分の腹黒い癖が初めて人のために役立ったんじゃないのか。

とりあえず行き先が分かれば十分だ。

僕が向かう場所は――

「早速行くか。二・アケリアに」

「あ、待ってください」

出て行こうとした時に管理人止められた。

なるべく急ぎたいんだよな。

あれ？何でいきなりこの人アップルグミを沢山出してるんだ。

「えっと、これは？」

「アップルグミ１０個。９００ガルドです」

いや、このお姉さん何言ってるんだ。僕は買うなんて一言も言ってないのに。

「１００ガルド。お得ですよ」

「いえ、買うとか言ってませんし」

すると、無料スマイルのお姉さんが一瞬一変し、

「情報も教えたんだ。買えよ」

あれ、この人？何か変わらなかった。一瞬の方が余計恐いんですけど。

「あら、私ったらやだ」

何この人？顔赤らめて両手で頬をさすって可愛い子ぶったりしちゃったて、この人の心の中には自分という存在が二人もいるの。

とにもかくにも買っておこう。死んで恨まれるなんてごめんだからな。

「ありがとうございました」

…僕が女を怖いと思ったのは、今日が初めてかも知れない。

～イラート間道～

「この先に彼らがいるのか」

ラ・シュガル兵士が来る前に、彼らと会わないとな。情報知ってるのは彼らだけだから。それにしても何故わざわざ二・アケリアに向かうのかな。誰かの故郷かな。

ん？魔物か。数を数えて7～8匹はいるな。
倒さないと先には進めないし……

「相手してやるか」

僕は銃を二丁取り出し、標準を合わせた。
よし、僕の立ち入ちも魔物の立ち入ちも悪くないな。じゃあ早速、

「悪魔の十字架、ブラッテイクロス！！」

僕は敵の中心に銃をクロスさせながら撃つと闇の十字架が現れ敵の群れを四散した。それと同時に双剣を手に取り、両手を翼のように広げると敵陣に突っ込む。

「さあていらっしゃいませ～、斬撃を食らいたいのは何名様ですか～」

僕はそう言いながら、次から次へと魔物を斬っていった。

「散沙雨、虎牙破斬！！そしてもう一度ブラッテイクロス！！」

僕は剣と銃を使いながら敵を蹴散らした。

ふう、結構倒したなってあれ？さっきより魔物の数が増えてないか？まさか魔物の縄張りだったのか。

「大丈夫ですか？手伝いますよ」

魔物に囲まれている僕に、黒髪の青年が声を掛けてきた。

この状況を助けるなんて相当のお人好しだな。戦力になるのは喜ばしいことだけどね。

ってあれ、確かあいつは手配所にあった、ジュード・マティスじゃないか。

「よっと、青年。油断したら危ないぜ？」

油断してた僕に、近づいていた魔物を、颯爽と参上したコートの

男性が巨大な剣で吹き飛ばした。

向こうでは、ジュードと見られる青年と金髪の女性が魔物と戦っている。

うん、僕の会いたかった奴らはこの人達だ。まさかこの人達の先を越してるなんて思ってなかった。

ともかく魔物を排除しないとな。話しはそれからだ。

「おたく。リリアルオーブ持ってる？」

「うん。持ってるけど」

「だったら、リンクしますか」

彼が言う『リンク』と言うのは、リリアルオーブを通じて意思を共有しあうことだ。そうすることで戦況を上手くたち回ったり、共鳴術技『リンクアーツ』という協力技を使うこともできる。一言で言うと気分爽快♪だ。

さっそく、僕はコートの男とリンクした。

意志を通じ合わせ、初対面だというのに僕が斬り上げた敵を、男が斬り落とすという連携プレーを魔物に与える。

「おたく。なかなかやるな」

「お前もね。じゃ、さっそく共鳴術技いきますか？」

「ああ、準備万端だぜ」

「「地を這え！！魔神連牙斬」」

息ぴったりに僕と男が剣を振り、衝撃波が３つ飛ばし、その衝撃波は魔物を容赦なく、ぶっ飛ばした。

気分爽快～♪

あっ、気分爽快って言っても敵を潰したから爽快って言ってる訳じゃないからね。僕はドＳじゃないからね変な誤解しないでよ。

向こうも魔物を倒したらしく、武器をしまい僕に近づいてきて、ジュードが治癒をしてきた。

「大丈夫ですか。怪我ありませんか？」

勝手に助けにきた後に、魔物を倒し終えると今度は人の心配。相当なお人好しなんだな。ジュード・マティスとやらは。

僕はジュードの軽くあしらうと、礼を言った

「ああ、助かった。ありがとう」

礼を言ってると、金髪の女性が話し掛けてきた。

「君は強いんだな。ここで、何をしていたんだ？」

僕はその質問に、速攻で応えてしまった。

「僕。君たちを追ってここまで来たんだ。いやあ、入れ違いに気づいて良かったよ」

「え？僕達を追ってって、まさかラ・シュガル兵！？」

そう彼らが勘違いし、僕に武器を向けてきた。

僕は慌てて、言った事を説明し直す。

「わわっ！？誤解だって。話しを聞いて」

弁解すると、彼らはお互いに顔を見ながらキョトンとした。そして、コートの男が手をひらひらさせると「信じて良いんじゃないのか」と言うと、彼らは武器をしまった。

助かった。情報知ってる彼らに敵対されたらそこまでだからな。

敵対心を解いたところで、自分が追ってきた理由を言った。

「単刀直入に言うよ。イル・ファンの研究所で何を見たのか聞きたいんだ」

「えっ？イル・ファンで」

ジュードはそれを聞くと、顔をまたキョトンとして見せた。

その顔からして何か見たんだな、やっぱり。

ジュードは顔をキョトンとしてた顔を今度は黙って俯かせた。黙っているジュードの代わりに金髪の女性が質問を応える。

「クルスニクの槍と呼ばれるジンの兵器だが、君は何故そんな事を聞くのだ？まさか手に入れようとしてるわけではあるまいな」

「違うよ。うん、ちょっとね」

ジンの兵器…クルスニクの槍をジランドとナハティガルはやっぱり完成させていたのか……僕の情報網を取り消されている間に、そこまでになってるなんて……

「その君の『ちょっと』とは、どういう意味なんだ？」

「あれは、危険な物だ。破壊しなければいけないって意味だよ」

今度は金髪の女性がキョトンとする番だった。

「君はもしかして、あの兵器について何か知ってるのか？」

「ほんの少しね。僕はその兵器を破壊するため、君達に聞きに来たんだ」

女性は片手をグーにし、手のひらを“ポン”っと軽く叩き納得した。

「すごいな。人間にも私のような意志を持つものが、存在するとは。私は少し人間を見くびっていたそうだ」

いや、目的が同じってだけで意志も同じってわけじゃないぞ。しかも何、自分が人間じゃないみたいな言い方してんの？……ってあれ、目的が同じってまさかこいつも……

「まさかお前も…クルスニクの槍を壊しに？」

「ああそうだ。私はマクスウェルだからな」

はい？マクスウェル？マクスウェルって四大精霊を仕える精霊マクスウェル！？

そう思い悩んでると、コートの男が後ろから女性の肩を叩き、話し掛けてきた。

「ま、そのことは後で説明するからよ。とりあえず目的は一緒ってことでしょ？」

女性はコートの男に応えた。

「ああ、どうやらそうみたいだ。追っ手ではないらしい」

「だったら、しばらく傍らに置いとかない。話しは見えないけど、青年結構強いしさ。いざって時に頼りになるかもよ」

何だこの人!?人を物みたいに。頼りになるって言われたのは嬉しいけどなんとなく腹立つなぁ。怒ってもしょうがないけどさ、なんだか納得いかねぇ。

「だったら、話しは休める所でしようか。とりあえず自己紹介だね。僕のぎめ…本名はソーマ。ソーマ・シックノード。よろしく」

僕の自己紹介が妙だったため、ジュードが問いかけてきた。

「今、偽名って言いかけなかった」

まずったな。適当に誤魔化すか。

「聞き間違いだって。空耳じゃない?」

うっ……、この否定のしかたは、ノーマルすぎる。大丈夫かなぁ…

コートの男が何か察したのか、ジュードに腕を回しこの場を誤魔化すように、自己紹介をしてきた。

「俺はアルヴィン。傭兵をやってる。おたくらの話しは読めないけど、よろしく頼むわ」

ちょいちょいと、アルヴィンがジュードのこめかみを指で叩きながら、『次はおまえの番』と言いたそうな顔をしている。

ジュードはそれを見るなり、ジュードも自己紹介をしてきた。

「僕は…ジュード。ジュード・マティス。よろしくね」

「私はミラ＝マクスウェルだ」

「よろしくみんな。ところで、どこに向かうの？」

その質問にミラが応える。

「行き先は二・アケリア。私が生まれ育った故郷だ」

精霊に故郷とかあるんだな。ま、そこを含めて後で話してもらうか。

僕――ソーマ・シックノードは彼らと一緒に、ミラー精霊マクスウェルの故郷――二・アケリアに向かうことにした。

第1話（後書き）

…題名が決まりませんね。もう少し時間をください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2319y/

テイルズオブエクシリア―【題名未定】―

2011年11月5日02時03分発行